

〔倭訓栞前編十八〕登ときのきざみ 日本紀に漏剋を訓せり、漏刻を伺ふて鐘鼓をうつ也、貞觀式に、

凡知時以鼓、示剋以鐘とみゆ、是は唐書に、更以擊鼓爲節、點以擊鐘爲節、といふによれり、更は時也、點は刻也、一説に寅の一點などいふは、一時を五ッに分ていふ也といへり、

〔松屋筆記七十〕漏刻、土圭、

與清曰、今俗登計伊をもて、時を量る器の總名とす、こはもと、漢土に、黃帝漏水器を製て、時刻を知事、を教へしより、漢晉以來、其工巧を極む、梁の惠遠法師が蓮花漏は、また一きは工夫をそへたる也、燈漏あり、沙漏あり、通雅十一に、燈漏の製傳はらず、沙漏は瓶に沙を貯るよしいへり、

〔隋書三十四〕漏刻經一卷、何承天撰、梁有後漢待詔太史、漏刻經一卷、祖暅漏刻經一卷、梁中書舍人朱史撰

刻經一卷、梁代撰、梁有天監五、漏刻經一卷、陳太史令、雜漏刻法十一卷、皇甫洪、晷漏刻經一卷、

初見

〔日本書紀二六〕六年五月、皇太子大兄初造漏剋、使トキノキヤ民知時、

〔日本書紀二七〕十年四月辛卯、置漏剋於新臺、始打候時、動鐘鼓、始用漏剋、此漏剋者、天皇爲皇太子

時、始親所製造也云々、

製作

〔朝野群載一文筆〕十二時漏刻銘并序

藤敦光

余台嶠訪道、法水問津、早屬鑽仰之餘、閑粗學律況之幽致、況復尋窮通於爻象之書、辨臧否於曜宿之術、仰察九野之度分、俯稽三光之盈縮、總其大較、用在日時、而每至雲霧晦暝、河漢陰靄、晝則陽景難測、夜亦星躔無觀、披月令於夏曆、昏旦之分易迷、窺景緯於燕家、甲乙之更何決、慨然以歎、徒送居諸、於是去嘉保二年孟陬之月、夢中案術、覺後施巧、其器圓也、象圓蓋之遞轉、其基方也、類方輿之不搖、天盤則縱橫三尺、表三才也、地盤則方各四尺、辨四序也、南中央有一孔穴、豎二寸、法二儀、橫四寸、分四點也、禽獸居中、隨十二時而形現、童子立上、向方角位、而指點、一動行一刻、八動成一時、每有動轉、必有音韻、不登臺以睹天文、不出戶以知時刻、唯此靈器、深以秘藏、然而出處行藏、隨時應機、更遇忘言之友、忽勵起